

キャリア意識の醸成が困難な学生とコミュニケーション授業のかかわり
—受講者における意識の変容とその質的研究—

山 口 博 美

Uneasy sutudents of making caree conscusness during the ommunication class
—The questionnaire study about the process of changing conscusness—

Hiromi Yamaguch

要約

短大生は、1年生後半から就職活動に入るため短期間において「キャリア意識」の醸成を求められる。筆者は短期大学小規模学科において「キャリア支援科目」のうち体験型を導入した「コミュニケーション論」を担当してきた。しかし自己のコミュニケーション能力およびソーシャル・スキルを獲得する過程で情緒的問題を抱える学生が多く、就職活動へのスムーズな移行に困難があった。講義終了後のアンケートと個別インタビューには、困難を抱える学生の「不安」の言葉が多く語られた。個人の問題としがちな短大生のキャリア意識を質的調査し、今後のキャリア教育授業の改善のために就職不安の深層部分を分析し解釈した。コミュニケーション科目そのものが孕む問題を捉え、さらに大学外でのボランティアや地域コミュニティーにおいて活動する社会人グループとの交流を組み合わせた実践教育方法の導入が、問題ある学生のキャリア意識をどう変容させたかをまとめた。

Summary

Junior college students are required to develop “career consciousness” in a short time because they have to pursue job hunting at the end of their first year in junior college. In this junior college, where students learn about business qualifications, the author has taught several career supporting, such as communication class in which students can enjoy their performance and present themselves. However, the students experienced difficulties in beginning the job hunting because most of them faced emotional problems in their emotion in acquiring communication and social skills. Interviews and questionnaires conducted after classes indicated that the students were worried had anxiety. The author performed qualitative research on career consciousness of junior college students, which is regarded as a personal problem, and analyzed in depth the anxiety of securing a job to help support the development of career consciousness among students. In this thesis, the author asserts that the introduction of educational methods, that combine volunteering, interaction with working people and active learning in class has changed students’ career consciousness since 2015.

はじめに

人口減少社会において、女性の働き方が脚光を浴びている。2016年5月の政府広報の中の「あらゆる分野における女性の活躍のための重点方針」なるものを読むと、日本では確かに女性の雇用機会は拡大し、社会を支える貴重な労働力であるとの認識は高まっている。だが、性の区別なく働き方も多様であってよいし、キャリアの考え方もその人の価値観に基づく生き方で異なると考える。大学を卒業時に一つの職業を選択することは、個人がその生涯、特に青年期以降のライフステージでの様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己を重ね合わせるうえで、重要な価値づけの累積となる¹⁾。さまざまな価値観にもとづくキャリア意識の多様化は、女子短大生にも多大な影響を及ぼしている。

将来の職業についての展望が持てず、何を志望し何を目指すのか自己決定しない、あるいは自己決定できない学卒者の職業未決定の問題は、アイデンティティーの拡散・危機とも深く関係している。短期大学生の場合、卒業までが2年間と短く、職業の十分な探索を行い自己の興味・関心について情報を得る時間や吟味する期間のゆとりがない。そのため将来の進路について、十分な時間と幅広いサポートを得る前に職業選択の時期を迎えるというケースが少なくない。学卒者におけるキャリア選択問題の背景には、経済的状況や産業構造の急激な変化など個人の力では解決しえない多様な外的要因が作用を及ぼしている。また特に女子大生は大学を卒業したらすぐに就職すべきだという社会通念は根強い²⁾。短期大学の期間的問題もあるが、彼らのアイデンティティーや職業意識の未成熟、積極的行動に出ない主体性の無さなど、心理的側面から問題に焦点を当てる必要がある。現代の若者論にたびたび登場する社会と主体的に関わろうとしない、関われない、好きなことと仕事を短絡的に結び付ける社会性のない意識や態度、内向きな生活感、人生観などが問題の根底に浮遊していると思われる³⁾。社会の外的要因も個人の内的要因も複雑に絡み合って彼らの問題を深刻化させている。日本の小・中・高校の進路指導法は指示的、強制的指導の色合いが濃い。学童期・思春期での職業選択を考える関連科目も進学のための主要科目に代わり、自分自身の人生や労働の価値観などを学び自ら意思選択、意志決定する指導、アプローチはほとんどとられてこなかった。将来の自己像を模索する人生の分岐点先送りされた結果、大学の卒業時の進路決定に情緒的不安を生み、決定への道筋がわからない状況を作り出している。就職したとしても3年以内の早期離職・転職率が52.3%と高く不満、混乱がそのまま継続している⁴⁾。Benesse⁵⁾によると、高等学校卒業まで就職を意識したことがない者が、35%いるという調査結果がある。高等教育機関への進学率の上昇に伴い将来の生き方・働き方について自ら選択・決定することなく、進路意識や目的意識が希薄なまま進学してきた短期大学学生の特色を捉え直すべきであると考え。若者のキャリア選択にまつわる諸問題は、個人の経済的・精神的自立の機会を失うだけでなく、貴重な人材育成の継続に歯止めをかけ、日本の将来に大きな損失を生み出すことになろう。

本稿ではキャリア支援科目の学修に情緒的不安を訴える学生からアプローチし、2015

年から、コミュニケーション授業の根底に孕む問題に目を向け、就職決定までの直接的、間接的にも影響を与えた諸要因について学生自身の自由記述と半構造的インタビューをもとに分析と解釈を試みた。

第1章 短期大学女子学生のキャリア意識の現状と先行研究

就職活動中の大学生のキャリア意識について、また就職活動に関連するストレスや職業不安については多くの先行研究が存在する。女子短期大学生のキャリア意識については「適職信仰」「受け身」「やりたいこと志向」といった表現で就業問題の心理的側面を取り上げている。「適職信仰」とは、いつか自分に最適の仕事に巡り合えることを信じて実現できることを強く願う姿勢、「受け身」は職業選択に対して、すべてに受け身で何とかなると考える姿勢、「やりたいこと志向」は、やりたくないことは無理にする必要はなく、やりたいことを仕事にしたいと考える姿勢を示している。「適職信仰」については職業未決定に対して抑制的に働くとし、「受け身」は職業不決断に繋がるとしている⁶⁾ 研究のある一方、キャリア女子大学生の「適職信仰」は、不安を増幅し就職意識を妨げるものと相反する研究結果もある⁷⁾。

先に述べたように日本の教育制度には問題があり、また心理的には「移行」そのものが不安の要因になるといわれるこの就活開始時期より「切迫感」と自分探しの「混乱期」を迎えると考えられる⁸⁾。大学生の職業不安に関する研究においては、「自己効力感」が職業決定に多大なる影響があり、職業意識醸成に効果的であると示されている⁹⁾。赤田等は4大生と短大生のキャリア教育における自己効力について比較した¹⁰⁾。浦上が作成した進路選択に関する自己効力尺度(OAS)及び坂柳の作成した職業的不安尺度¹¹⁾を用いて両者を分析し、その結果自己効力尺度においては短大2年生より四大4年生の得点が高く、また職業不安については、四大4年生より短大2年生の得点が有為に高いことを示した。浦上は、進路選択に対する自己効力感の高い者は、職業が自分の成長にとってより必要かつ重要なものと考えているのに対し、自己効力感の低い短大生は4大生に比較して、職業についての考えがまとまっていなかったり、単に生計を立てるための手段と捉えている傾向を示した。こうした自己効力感の低い短大生は、選択行動を避けたり、不十分な行動に終わってしまうため、自己不安の増幅、失望、諦観、職業選択の回避という職業不安を抱える要素が高いことを数量的に分析した。彼らの不安が、大学内でのキャリア支援科目で変容したり軽減するかについて、その意識の変容を質的方向から分析し研究したものは見当たらなかった。短期大学キャリア支援にかかわる教職員の支援の拡充は急務とされているがその道筋に何が必要か。キャリア教育授業の孕む問題や学生の不安な意識を今一度丁寧に傾聴し分析、解釈することは意味があると思う。

第2章 本研究の概要

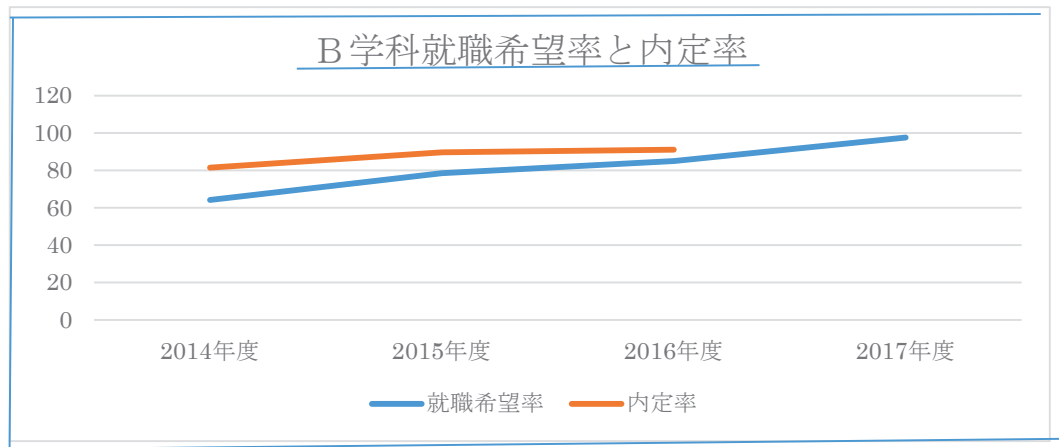
(1) A 短期大学小規模学科の現状と問題点

A 短期大学小規模 B 学科の就職状況についての状況を見ると、表1のようになる。卒業時の数値による結果のみを考えると、キャリア関連科目を統合し、コミュニケーション論の内容を再構成した2016年度以後、就職希望率、内定率は上昇し成果は出ていると考えられる。2016年12月末に45%だった内定率が2017年度は、12月限在で既に80%に達した。就職意識を問題とすると就職希望率をまず問題とすべきだが、2014年度のアルバイト・家事手伝い・未内定の合計は17名で就職希望率が64.2%と低く2015年度は12名で75%と見過ごしておけない数値であった。就職を希望しない学生は、アルバイト継続、または就職活動自体に不安を感じる、や体調不良という理由だった¹²⁾

B 学科はビジネス資格や創作等の多彩なコースや科目を組み合わせて学べる学科である。創作系はサブカルチャーとして若者に人気があり、特にアニメ産業は、今年度2 桃円規模に売上が拡大し世界的産業に成長している中¹³⁾、B 学科には、将来はこの道で「やりたいこと志向」の強い学生が多い。しかし創作系の採用幅は狭く就職としては安定しない職種で、まずアルバイト採用からと企業にとって都合の良い雇用形態をとるところが多い。それでも技術を習得し認められるまで、アルバイトで頑張るという未内定者の実態がある。こうした数量で測れぬ B 学科学生の実情を知り、各自のカウンセリングも今後の課題であろう。就職意識を持たずに入学し、主体的な動きを見せることがない学生と、入学時より明確な将来像を持っている学生とは明らかに授業態度から異なる。その差は時間を経るにつれて大きくなり、就職意識の醸成に不安要素がからまって、自己理解の希薄さが職業不安となり、就職活動にも大学内での学習にも影響が出てくる。

B 学科 就職状況 表 1 (2014 年度卒～2017 年度卒業予定)

	年度 分類	年度			
		2014 年度卒	2015 年度卒	2016 年度卒	2017 年度卒業予定者 12 月 時点
A	卒業生数	42 名	40 名	40 名	43 名
B	就職希望者	27 名	30 名	34 名	42 名
C	内定者	22 名	26 名	31 名	37 名
D	未内定者	5 名	4 名	3 名	—
E	アルバイト	8 名	3 名	1 名	—
F	家事手伝い	4 名	5 名	2 名	—
G	進学	3 名	2 名	2 名	1 名
就職希望率 (B/A)		64.2 %	75%	85%	97%
内定率 (C/B)		81.4%	86.6%	91.1%	12 月 現在 88%



グラフ1

A 短期大学の小規模学科（以下 B 学科とする）で「コミュニケーション論」が開設されたのは 2006 年、その前後でプレゼンテーション他キャリア支援が次々に開設された

2015 年には、それぞれ分かれて配置されていた「キャリアデザイン」「コミュニケーション論」「プレゼンテーション」「社会人基礎講座」「ホスピタリティー」「インターンシップ」「ボランティア」「短大生基礎講座」が共通科目の「キャリア支援科目」として統合され、学生の就職支援を明確に打ち出す体制をとった。筆者は 2015 年よりこの学科で専任として学生の授業及び生活全般について深く関わりると同時に、学生の「キャリア意識」醸成の問題に向き合うこととなった。「コミュニケーション論」は教養を基礎に社会人として必要とされる表現力と伝達力、企画力、対人関係力、また実社会で求められる実務的マナーまでを身につけさせ、就職意識に接続させようとするのが目的である。

(2) 研究目的

本研究の第一の目的は、A 短期大学 B 学科の学生を対象として以下のようにする。

B 学科には、就職に関連した意識の醸成を目的とする「キャリア関連」科目の一部である「コミュニケーション論」を学ぶ中で、就職意識へ繋がったかについては、「気がかり、不安、恐れ」などネガティブな感想をもち、就職意識へ接続に困難な学生がいることが問題となった。コミュニケーション授業のエンカウンター授業を表面的に受容しながら、潜在意識としてネガティブな感情を持ち、行動できない学生の意識の掘り起しは、重要であると考えられる。2016 年より大学外で地域の社会人や様々な社会活動をする人々との交流を授業内容に組み入れ、教室外でのコミュニケーションを実践活動として実施した。同時に質的アセスメントも継続し、学内外の授業がキャリア意識接続にどう影響したかを質的分析し解釈した。その結果を踏まえて、次期授業に向けての検討課題としたい。

仮説 1) コミュニケーション論のグループ体験（グループエンカウンター型）授業は、自己理解と将来に向けて明確な職業意識を育てる効果があるとする先行研究は多

い¹⁴⁾。しかし自己効力感が低く、自己不安を持つ一部の短大生には、授業の特色が、不安、恐れや揺らぎを持つ学生の心理を顕在化させ欺瞞的受容に陥る要素を孕んでいる。

仮説2) 社会人との交流は、1) の学生の職業意識の接続を支援する。

(3) 対象者

A 短期大学 B 学科学生、2015 年～2017 年においてはキャリア支援科目の「コミュニケーション論」受講生の延べ61人のうち、不安な感情・気がかりを持ち就職活動にスムーズな接続が困難な経過を示した9人を継続してインタビュー対象者とした。

第3章 「コミュニケーション論」とキャリア意識への接続

(1) 大学におけるキャリア関連科目と「コミュニケーション」

学生に「最も不足している能力」として企業の採用担当者の85%が「コミュニケーション能力」を挙げている。2017年度大学の95%以上が「コミュニケーション」関係科目を総合教養やキャリア関連科目として掲げている背景には、企業や社会の声がある¹⁵⁾。

(1) - 1 キャリア意識

キャリア意識の計測方法の一つに「キャリアテスト」があるが、B学科学生の授業の中で同テストを計測した数値と関東圏内他大学生の数値を比較した。他大学生の数値は、先に述べた安達の研究より転用した。B学科におけるテスト結果の特色は、「適職信仰」においては他大学に比較して特に強い傾向はなかった。高い数値を示したのは、「受け身」と「やりたいこと志向」である。「受け身」は「将来のことはその時の流れだと思う」「将来の仕事は何とかなると思う」の2項目は特に高く、また「やりたいこと志向」は「自分の時間や自分の世界にこだわりたい」「将来は好きなことを仕事にしたい」「自分の好きなことができる環境にいたい」が他大学学生とほぼ同じである。自分の好きなこと、やりたいことにこだわる姿勢であるが、それ以外の仕事は今から準備しようとしないうちも垣間見える。

(4) 「コミュニケーション論」講義の構成 (表2)

筆者の担当する「コミュニケーション論」の講座は、コミュニケーションの概論とあるが、演習である。コミュニケーションは、その国の時代を反映した文化、習慣、個々人の対人間の相互作用によりそれぞれの場面で刻々と変化し変容する。したがってコミュニケーションを授業として、学生たちが信頼関係を作るための自己・他者理解、また自己を表現するスキルを学ぶには、体験型(グループエンカウンター形式)の実践型授業が最も効果的であると考え、津村と国分のプログラム¹⁶⁾より5種類を組み合わせ、実施してきた。教育訓練としても用いられるこのプログラムの効果については先の実施報告がある。2014

年以前の講義終了後に毎回実施していた学生の感想には、職業意識醸成の効果について、検証できたといえなかった。そこで2016年よりそれまでの学内体験型から、学外での多様な人々と交流の場を作り出し、その意識の変化を探索した。参加体験後の感想記述やFBで口頭発表、自己の考えや感じたことを発表し、共有できることもスキルとして求めた。本講座では、社会的スキルもコミュニケーションスキルも技能であり、「演習」として練習し、身につけることをシラバスにも明記した。この講義では表2のように、グループエンカウンター形式体験授業を参考に構成している。

表2 「コミュニケーション論」授業概要と狙い

3回で1テーマ 学習テーマ内容	室内学習の概要（体験型授業）	狙い	2016年以降 学外実践活動を追加
1 コミュニケーション	アイスブレイク 「リレーションシップゲーム、」 自・他者紹介「インタビューゲーム」 「匠の里」ゲーム 情報伝達・傾聴力	表現力、協調性、 傾聴力と自己開示 チームワーク作り	地域で高齢者にインタビュー (正課外)「グリーンポケット」 高齢者支援
2 ディベート	経済新聞記事の輪読 社会問題についてディベート 高齢社会・少子化問題、仕事と社会	職業情報の収集 職業適性の発見 女性の一生とキャリア	青年障害者交流「あめんぼ」 コミュニティーカフェ
3 ディスカッション、	ゲーム「社会で働く意味と目的」・「優先度の討議」 「船長の決談」 他者の話し方、内容を聴く。 「自己理解、自己の将来像を探る」	キャリア意識、 自己分析 自己効力感	子育てサロン、 野菜販売 就職意識調査
4 自己を見つめる	記入とスピーチ「私とは・・・」 職業適性テスト⇒ライフデザイン 「なりたい自分」	自己概念 職業的展望、 自己探索	子供食堂 知的障害者施設「SORA」
5 自己開発と プレゼンテーション	企画とプレゼンテーション「地域のイベント企画」面接と自己PR スピーチ「過去の私と未来の私」	自己PR 業界と職種の研究	

(5) データ収集とインタビュー協力者（分析焦点者）

2015年からの下記インタビュー協力者とは、承諾書および研究倫理遵守に関する誓約書を受領し教室あるいは研究室にて30分程のインタビューに応じた学生である。コミュニケーションの授業内容、その直後の感想や提出物により、インタビューガイドを作成した。就職活動へと移行する行動時期、活動中の精神的な悩みなど学生のペースや話の流れに逆らわず進めて、多用された言語、考え方から読み取れる言語を取り出しまとめた。今回の研究では、アンケート、自由記述インタビュー等からの総抽出語数は35,391語となった。

表3 インタビューで用いた質問事項

1	コミュニケーション論の5つのテーマは、実践型で構成されているが、就職したいという思いに繋がったか、不安や嫌悪につながったゲームやロールプレーはあったか。
2	仕事の意味などディスカッション、ロールプレーで実践したが、途中の気持ちや参加する前と後で、何か変わったという感覚はあったか
3	他者の前で就職の意味・意思や発表することには、どんな気持ちの動き、印象を持ったか
4	授業後、内定を得た友人と話すときアドバイスを受けたか、どんな気持ちだったか
5	毎回提出する感想は率直に書けたか、(内定前は 内定取得後は)
6	グループでゲームや討議をする時どのような感想をもったか
7	FBは、率直な気持ちを言えたか
8	自己分析に対して、どんな印象を持ったか。自分の能力や性格をどんな仕事に合うか
9	仕事に関する討議や、レポート・発表はどんな感想を持ったか
10	就職に関して家族、またキャリアセンターや教員に相談すると、どんな気持ちになったか。どのような言葉が嫌か、またほっとした、救われたと感じたか。
11	仕事の適性テストや自己開発のプレゼンにどんな印象をもったか、その後の就活活動についてどう影響したと思うか
12	社会人との交流では、初回どんなことを想像して参加したか
13	大学外で、社会人と一緒に活動した時、就職に対しての意見や経験などで印象に残っていることは何だったか
14	最初に社会人から活動の意味や注意点を学習し、活動後の気づきを話したときどんな気持ちになったか
15	社会人の言葉や行動から、何を考えたか

ゲームの中、あるいは実施後のFB、グループワーク時に感じたことをアンケートを基に、頻出した言葉を聞き取り整理した。女子大生の表現する言語、語彙は時に筆者の理解の及ばぬこともあり曲解もあるので、曖昧な言葉は補足し心情により近いものを採用、頻出したものでも近い意味は一つに統一した。

(6) 質的研究分析方法

本稿では、解釈主義的視点に立つ分析法として木下(1999)の修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下M-GTA)を使用した¹⁷⁾。この研究では、「コミュニケーション論」受講者の内、分析焦点者の学生に対して実施された。就職活動中において、短大生が仕事への移行を目指す時間的流れの中で彼らのネガティブな主観的意識が「授業に内外での感覚や経験」「出会い、エピソード」などでどう変容していくかを解釈した。これはM-GTAでは「分析テーマ」となる。M-GTAでは分析テーマと分析焦点者の2つの視点に絞ってデータを見ていく方法をとる。「分析焦点者」とはデータを解釈する際、不安感を持つ研究協力者(本稿では受講生のうちインタビュー協力者)を個人ではなく、ある現象としての特色を共有する一団として捉え設定する。本稿におけるテーマは、分析焦点者は「講義受講中に持った就職意識醸成にネガティブ意識のある人」と設定、「その感情をどう変容させたか」を質的に見た。故に分析焦点者にとって主観的経験や分岐点となっ

たことは何か、という視点から言語、文章を逐語データとして解釈した。自由記述回答データを用いたテキストマイニング手法には、他に KH coder や SCAT など多々あるが、分析焦点者の潜在的な意識の変化を時間的枠、場所的枠でとらえるには、現象的経過に沿ってアプローチする M - GTA が効果的と考えた。

逐語データをコード化しさらにカテゴリーとして分類した。コアカテゴリーについては [I, II, III, IV] で示し、サブカテゴリーは《 》、概念を『 』としてその他付随して出てくる定義などは「 」と示している。グランデッドセオリーは、小規模のデータから分析結果と分析結果を合わせてさらに高次の分析概念を得るような階層的な手続きを有しているため、テーマなどに多様な概念を用いる。

就職意識の接続カテゴリー一覧表 表 4

就職意識の接続カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義
I 接続に足踏み状態	授業という枠での違和感・虚構 受け身	<ul style="list-style-type: none"> ・本音と建て前 ニヒリステイック 場面緘黙と怒り 現実感のない空虚さ 	<p>成績に関連する不安 前向きのことしか書けない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ体験は受け入れられる者と、居心地の悪い者がいる。 <p>正論を、FBで押し付けられている苛立ち。教師の求めることに合わせる、グループに合わせる自分の違和感あった。家庭環境、経済的環境への怒りがあるから話さない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたい仕事がないが、まだ何とかなる。とりあえず何か見つける。
	見えない縛り・葛藤	<ul style="list-style-type: none"> ・友達関係 ・親との不協和音 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループディスカッション、周囲の目が気になる。 恥をかきたくない。 ・親の言うとおりにすべきという束縛と親のようになりたくないという意識 (自分の親は成功者ではない哀しさ)
II 接続に停滞と混乱	こだわりと現実のギャップ	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事へこだわり「資格」「経験」へのこだわり ・自己の選択の有効性 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなことを仕事にしたい。どんなことでもいいから好きなことに関わってほしい。 自分のこだわりは、他者には恥ずかしくなくて言えない。(能力無いのにと思われる屈辱) 夢は捨てたくないが、実現困難だと分かっている。 選択してきた資格・経験を生かした仕事がしたい。
	恐れ 揺らぎ	<ul style="list-style-type: none"> ・能力不足が顕在化 ・露見の恐れ 就職できない現実 ・自信の崩壊 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームは楽しいが、自己開発・展望のブレゼン是自己の能力の欠如がわかり自己嫌悪に陥った、自分にも他者にもわかる、知られるのは嫌だ。内定者に会いたくない。 予想外の展開に落胆の動揺した。 優等生だった自分分がなぜ不採用か、理由がわからないから、次の対応が分からない。

<p>III 接続へのものと 社会意識</p>	<p>焦燥と疲労 帰属願望</p>	<p>・精神的疲弊 ・時間的制約</p>	<p>・就職が決まらない現実が迫る恐怖。家庭環境が腹立たしい、哀しい。不合格通知に人格を否定された気がした。その衝撃から将来が見えない、ボラントリーアが息抜きになった。 卒業までにとりあえず何とかしたい。社会に帰属したい 選択肢が減少し、焦りで苦しい</p>
<p>IV 接続に他者の 介入 修復の方向</p>	<p>撤退・依存 社会という枠で他者 との交流と刺激</p>	<p>情報の遮断、一時回避 他者の指示を摂取 柔軟性と寛容・勇気の 取得に成功</p>	<p>・とりあえず今は撤退し一時休み、結論は先延ばししたい ・誰かに依存、他者の指示通りにしたい ・「とりあえず」の言葉に抵抗感がある ・ボラントリーア、社会実践の場では、自分をさらけ出した。大人の就職の考え方が、柔軟で気が楽になった。失敗してもいいと思えるようになった ・仕事への姿勢は、それぞれでいいという社会人の言葉に力が抜けた</p>
<p>V 意識再構築と 接続</p>	<p>視点の変更 不安の軽減</p>	<p>不満足の内定から意 識の転換 他者の言葉に誘発 受け入れることから 将来を見る、進む</p>	<p>・満足ではないが「とりあえず」今は安心したいし、今後も勉強を継続し、次のステップへ向かう。 ・社会人の「第一次就職」という言葉に「とりあえず」の「なげやり」感が消え、後ろめたさが溶け新たな視点を育て、将来を継続して考える就職意識となった。 実践活動で将来のことに展望が持てた。 ・長い人生で何回も転職してキャリアを積むのが普通である</p>

第4章 意識変容のプロセス

(1) 変容のプロセスの結果分析

(1)-1 コミュニケーション論受講中の就職意識の変容過程

今回の分析の結果、就職意識への接続の[カテゴリー]はI～V段階が抽出された。この5段階は、コミュニケーションの5テーマが各3週で終了する経過と重なることとなった。この5カテゴリーを構成する《概念》は17個存在した。これらの概念は自由記述やインタビューと照合、概念間の比較を経て『サブカテゴリー』13個に生成され、その「定義」も示したのが表4になる。

(1)-2 [I接続に足踏み状態] とその構成要素について

コミュニケーション論等の授業においてゲーム・ロールプレーに積極的な目的をもって参加し、同時にキャリアセンターや指導教員のその他内外のサポート資源を駆使して早期に自己の就職意識を構築する学生がいる。こうした学生は、早期接続完了型として、今回の分析焦点者として扱っていない。

[接続に足踏み状態]は、表4に示した様に、第1～3回のコミュニケーションをテーマにした授業での分析焦点者の意識を解釈している。初期の自己紹介ゲームは、自己像を探索する内容に戸惑いと抵抗があり、盛り上がるグループとしらけた雰囲気のままグループが出てくる。このカテゴリーは、《違和感・虚構》と《縛り・葛藤》《受け身》の3つが生成された。とりあえず教師の求める姿に合わせようと欺瞞的に共感、受容する居心地の悪さ《違和感》と、成績がらみの《見えない縛り》や心理的抵抗との《葛藤》が拮抗する[足踏み状態]である。就職意識はまだ漠然とする中『建前と本音』がちらつく《虚構》の自分に怒り、場面緘黙で防御する。こうした不安が他者と距離を置こうとするか、あるいは斜に構えて言葉にしないが批判的な雰囲気『ニヒリスティック』に繋がる。この意識の根底には社会性欠如や経験不足を要因とする「恥を回避したい」気持ちから自己開示できないと解釈できる。また「何とかなる」という反動的な強気を見せて、自己中心的な開き直りを生む。主体性の無い《受け身》が、周囲を冷やかに見る態度に繋がり、B学科の「キャリアテスト」において「受け身」の項目が他校大学生より強く出た結果と結びつく。

(1)-3 [II接続に停滞と混乱] その構成要素について

[II接続に停滞と混乱]はサブカテゴリーに《こだわりと現実のギャップ》《恐れ・揺らぎ》の2つを持つ段階である。ディスカッションが頻繁に行われて、他者にアドバイスをもらいながらのゲームは他者から自分の話し方や職業意識を評価される。自己の仕事への「こだわり」や論理性の矛盾あるいは社会性の有無が自己にも周囲へも露見する段階であり、潜在意識の中に深い不安と恐れ of 要素が見える。また就職活動を継続する中、将来像で述べた『仕事へのこだわり』に執着する段階である。B学科学生の高得点を示す「こだわり

志向」の結果と一致する。様々な資格取得も《こだわり》を実現する手段であり、就職に生かしたいという学生の意識がある。しかし『就職できない現実』が心に重くのしかかり、自己の就職意識そのものに《揺らぎ》が生じる。スピーチも将来への計画発表もまた自己の就職意識を問い直すことにもなり、活動が停滞する者にとっては『自信の崩壊』と混迷を深める要因となる。家庭環境や経済的不安も「怒りと哀しさ」になると記述に類出した。《就職できない現実》が迫り揺らぎは大きい。

(1)-4 [Ⅲ就職意識接続へのもがきと社会意識]その構成要素

[Ⅲ就職意識へのもがき]はサブカテゴリー《焦燥と疲労》《帰属願望》から生成された。「就職が決まらない現実」が常に意識に上るようになり、「卒業までにとりあえず決めなければ」という『時間的制約』が迫る恐怖と、就職活動も終盤となると「選択肢の減少」してゆく事を実感し、《焦燥感》に活動が鈍る段階である。「残念ながら、採用を見合わせます」という通知を幾たびも受け取り、「人格を丸ごと否定されたという衝撃」は多くの焦点分析者の記述に類出し《精神的疲弊》になる。しかし授業では、ディベート（保育所不足・女性活躍社会）を通し社会に本気で向き合う空気が生まれる。社会の構成員としての存在、法律、規範の中で生きる意味を理解し「帰属」したいという意識が生じてくる。また課外の活動としての社会人との交流やボランティア活動もさらに活発となり、交流が刺激あるいは息抜きになったという記述が多くなる。

(1)-5 [Ⅳ接続に他者の介入者、修復への方向]の構成要素

Ⅳは《撤退・依存》《社会人との交流・刺激》という2つの拮抗するサブカテゴリーが生成され、構成する概念は、『情報の遮断・一時回避』『他者の指示を摂取』『柔軟と寛容、勇気の取得』の3つになる。「内定」に一安心するが、まだ他の選択にも未練があり就活を継続するモラトリアムな焦点分析者と、理想的将来像がまだ明確に描けない「疲労感」が強い内定未取得の分析焦点者に分かれる。精神的ひきこもり状態で結論は先延ばしにする『一時回避』者が出る。授業では全員の前での「なりたい自分」「栄光の日」の発表があり、質問を受け評価される。この段階で自己像の定まらぬ分析焦点者は苦しくなり授業を欠席、回避する状態となった。また自己の将来像に自信喪失し、内外の相談者の指示に《依存》、短絡的『摂取』が強くなる段階である。反面『「とりあえず」ここに就職したら、と進められた』ことに強い反発を抱く。さまざまな意味で頻繁に使用される「とりあえず」と「とにかく」という言葉については、後の考察で述べたい。大学外の交流やボランティアを自主的に継続する者が出て「社会人の考えに誘発された」「柔軟さに気が楽になった」という言葉に、分析焦点者の視点が変わったことが覗えた。2016年より社会実践をまず予備学習から始めたこと、特に子供の貧困を考える「子供食堂」、知的障害者の創作活動支援事業所「SORA」等は立ち上げの経過、運営の諸問題、将来の活動展開まで現場で学習したことが背景にある。利害関係のない大人と率直に話し、こうした社会貢献の仕事に

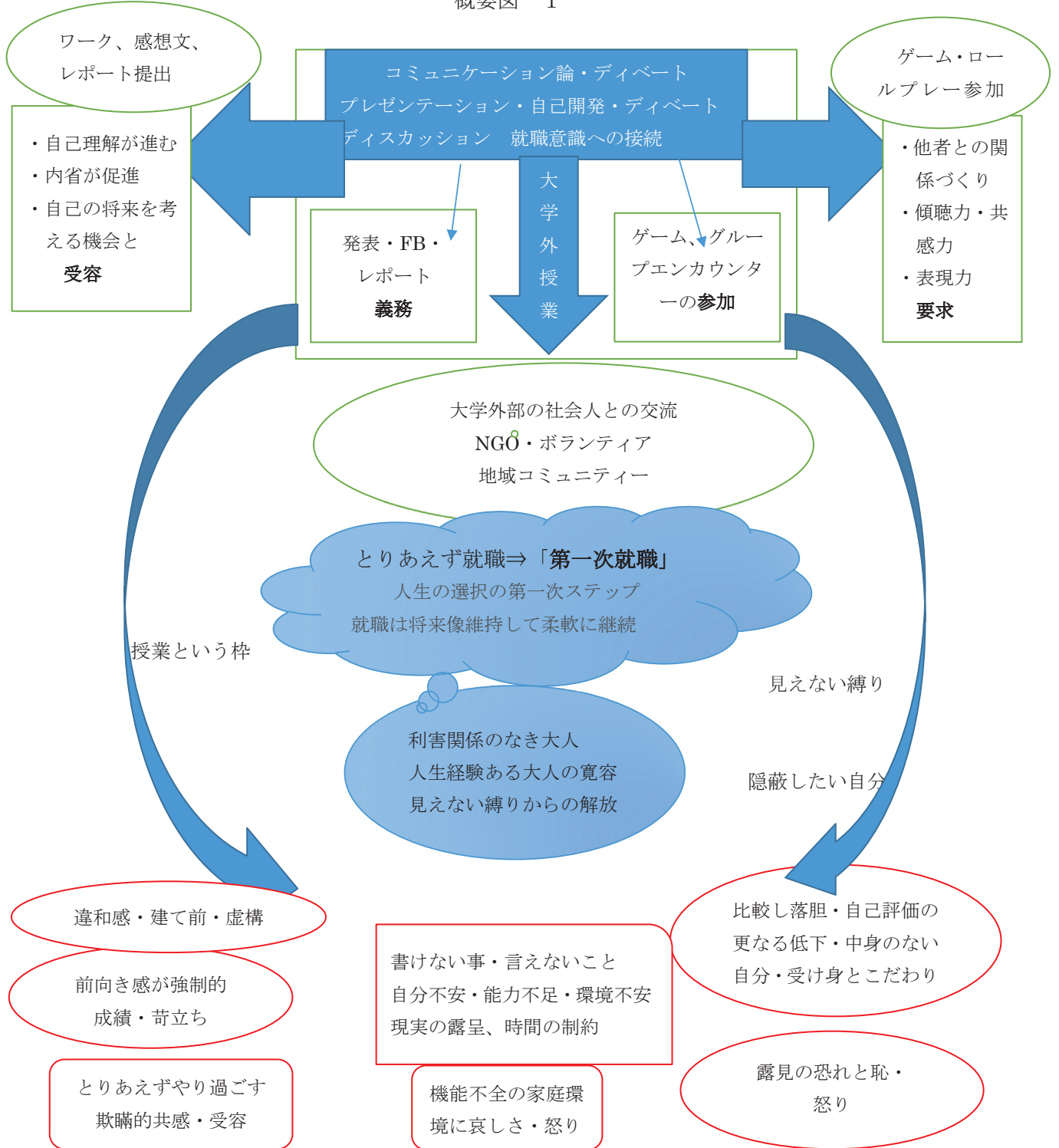
関わる自分を実感したことで自己効力感を得たということが出来る。分析焦点者の「恥をかくことの恐れと不安」を取り除き《修復の方向》を示して、多大な影響を及ぼした。この背景には、利害関係のない大人の前では素直に自己開示できたこと、さらに「若輩者の自分」を意識し恥をかくことを恐れなくなり、多様な家族の在り方を理解したと解釈できた。

(1)-6 [V就職意識の再構築と接続]

[就職意識の再構築] は前段階からの《視点の変更》と《不安の軽減》の2つのカテゴリーが生成され、構成された概念は『不満足な内定だが意識の転換』と『他者の言葉からの誘発』『受け入れることから将来を見る、進む』の3つである。この段階では、「不満足な内定」だが、今は受け入れようという分析焦点者が出てくる。「とりあえず」の就職を前向きな「第一次就職」とする『意識の転換』ができたという分析焦点者の段階である。「第一次就職」とは「第一次医療」などと同じ捉え方であり、まずは包括的な視点で『受け入れることから未来を見据えた全体的様相』を判断、次に繋げるという意味である。『社会人の言葉に誘発』され《視点の変更》に成功し、長く潜在意識としてあった自己効力感の欠如の《不安が軽減された》。就職意識は、現在から未来へも接続する探索行動であると視点が展開し、囚われる自己と決別した記述がみられた。

35,391語の上位30語を集めると前半および後半に頻繁に出てきた語は「とりあえず」であった。単なる口癖ではなく普段から保有する思考性として、キャリア形成上の重要な行動指針となり、「時間選好性」が性急さを意味し、学習や生活面での挫折経験者から出た場合が多いとあるが¹⁸⁾、本研究のカテゴリー [III 接続へのもがき] の中で、《帰属願望》と《時間的制約》として分析焦点者の概念に「とりあえず卒業までに何とかしたい」があり合致している。反面、カテゴリー [IV 他者の介入] では大学や家族から何度も出る『とりあえず就職』に抵抗を示し、こだわりの強いB学科分析焦点者の「挫折」「諦め」を認めることへの抵抗と解釈できる。さらに [V意識再構築] のサブカテゴリー《視点の変化》では、分析焦点者が利害関係の無い社会人の前で自己開示し、持続性を持った「暫定的目標」として、中寫の示す「時間的順序の選択性」を示した。さしあたって中間目標の達成とした、包括的な視点の「第一次就職」を受け入れた。自己の不安から解放する視点を獲得、就職意識を接続できたと解釈できる。この「第一次就職」という意識こそ分析焦点者が、自己効力感の欠如や社会経験不足、家庭環境等からの不安や恐れ、怒り等の見えない呪縛を覆し、自らダイナミックな人生の視点の展開を生み、就職活動において自発的な意識を構築した過程と考えることができる。

概要図 1



3. 概要図1

この図は上位の中心にコミュニケーション論という授業の概要を示した。この授業枠から上位にある左右にまっすぐに広がる太い矢印は、授業内容がグループ活動を中心として参加体験の内容であり、コンテンツ (contents) である。書いた感想、話の内容はすべてのメンバーが聴き、言葉・動作としてグループの中で見たり聞いたり、捉えることができるデータである。しかしそれらは断絶した、あるいは断片的なもので、受容、提出、参加を義務として要求している。それに対しねじれて下に繋がる矢印は、プロセスとしてうごめく潜在意識の存在である。プロセス (process) は、授業に上がってこないテーブルの下での分析焦点者一人一人の不安感情、欺瞞的態度、変化する心理的状況である。縛りや枠を超える展開軸の中心となるのが社会人との交流、その言葉である。

4. 考察

キャリア教育の重要な対象者である非接続意識を持つ「分析焦点者」の存在は、これまでの量的分析で十分捉えられてきたとは言い難い。コミュニケーション授業は、学修者各自のグループ内での動きや発言から、自己の将来像発掘と理想的職業の発見、気付きを誘発する授業であるが、国分、津村も自己開示できぬ者が少なからず存在するとしている。他者(特に学友、教師)からの評価が、直接あるいは間接的に露見することを恐れる。リレーションを作ってグループ内でのダイナミックな展開を期待する授業形態そのものが、分析焦点者の学友の前で恥をかく恐れ、機能不全の環境への怒り等の情緒的不安を孕み、顕在化させるという解釈ができた。それを覆したのは、大学外での実践活動である。分析焦点者は、利害関係の無い社会人の前では失敗や恥をかくことを恐れず、自己開示できる事を体験した。

仮説1) これまでのコミュニケーションの体験型授業内容は、潜在的不安のある分析焦点者の「違和感」「揺らぎ」「恐れ」「怒り」を顕在化させ、自己のキャリア意識への接続の不安の拡大し、混乱させる要素を孕んでいた。これは、常に自己と他者に距離を置き、公の場で恥をかく経験を避けてきた分析焦点者にとっての自己防衛である。今後の課題として、コミュニケーション等キャリア支援授業は、自分を抑制、抑圧して不自然な欺瞞的共感性や欺瞞的受容性に陥らないように、教育的カウンセリングの導入が必要であり、ファシリテーターのスキルを高めて進行させるプログラム作りが課題である。この自己開示できぬ恐れからくる抑圧や抑制の壁を取り除いたのが、社会人との交流だった。仮説2) コミュニケーション実践型の授業で2016年より積極的に導入した「社会人との交流は、学生の職業意識への接続を支援する」の検証は予想をはるかに超え、新たな職業観や家族観を得た結果となった。社会実践を通し、単なる表現力や職種を学ぶだけにとどまらず、一生涯、「人はそのステップで最適な仕事を求めて生き続けてゆく」ものであるという「第

一次就職」の視点が学生の職業意識を大きく転換させ、焦点分析者の抱く呪縛から解放した。今後の大学内でのコミュニケーション授業の一環として継続するためには、多様な地域社会の人々との連携を拡大充実させ、地域の求めにも応える相互作用的授業が必要であると結論を得た。

引用文献

- 1) 部科学省 (2004) キャリア意識教育の必要性
- 2) 下村英雄 木村周 (1994) 大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定
キャリアガイダンス研究 No 15
- 3) 古市 憲寿 (2014) 働き方は自分で決める 講談社文庫
- 4) 松井 賢二 (2012) 学校における「キャリア教育」の現状から考える
新潟大学教育実践センター研究紀要
- 5) Benesse 教育開発センター (2015) 青少年教育調査
- 6) 安達 智子 (2008) 女子学生のキャリア意識—就業動機、—キャリア探索との関連—
心理学研究 2008
- 7) 杉山効平 新川真紀 (2013) 大学生における就職不安とキャリア意識との関連
北方圏学術センター年報 Vo6
- 8) 金沢勲 石川悦子 小嶋明子 (1998) 移行期の心理学—心と社会のライフイベント
- 9) 浦上 昌則 (1996) 就職活動を通しての自己成長—女子大学生の場合—教育心理学研究
浦上 昌則 (1995) 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に関する
自己効力、就職活動、自己概念の関係から—教育心理学研究 44
- 10) 赤田太郎 若槻優美子 (2011) 職業的不安に対する大学短期大学のキャリア教育の現
状と課題—ソーシャルサポートと自己効力が与える影響—龍谷紀要
- 11) 坂柳 恒夫 (1995) 大学生の職業不安に関する研究 広島大学大学論考
- 12) 秋草大学キャリアセンター調査 (2015)
- 13) 朝日新聞・日本経済新聞 (2017) 10月26日朝刊
- 14) 矢崎裕美子 高村秀史 (2014) 「コミュニケーション力」を伸ばすための授業実践と学
生の自己評価 日本福祉大学教育センター
塚田 智香 (2014) コミュニケーション能力向上を目的とした体験学習の実践
成徳大学紀要
- 15) 厚生労働省 (1999) 青少年のキャリア意識と社会人基礎力
- 16) 津村 俊充 (2003) 教師のための体験学習実習集 Creative School
—生き生きとしたクラスを作るために—
国分 康孝 (1992) 構成的グループエンカウンター 誠信書房

- 17) 木下 康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的研究への誘い
- 18) 中 剛 (2013) とりあえず思考と初期のキャリア形成—地方公務員の入職行動の分析— 日本労働研究雑誌
中 剛 (2009) 進路選択における「とりあえず志向の発生因」 神戸国際大学紀要

